

千葉県松戸圏域における受動喫煙に関する 調査報告⁽¹⁾

— 喫煙経験の有無と受動喫煙による心身への影響との関連を中心に —

中村 真*・池田 紀子**・後藤 史子**・金子 瑞季**

要 約

本稿は、千葉県松戸圏域 地域・職域連携推進協議会が推進する「受動喫煙の防止」のあり方を検討するうえで必要な基礎的資料を収集することを目的に行った質問紙調査の分析結果をまとめたものである。管内における職域世代、プレ職域世代（高校生）を対象に質問紙調査を行った結果、世代を超えて未だに受動喫煙に対する認識は十分ではなく、特に、3次喫煙（サードHANDSモーク）への理解が不足していることが明らかになった。また、受動喫煙が非喫煙者の健康に負の影響を与えることは概ね理解されているものの、受動喫煙に起因する身体症状や精神的ストレスの経験率は、喫煙者に比べて非喫煙者において顕著であることが示された。

以上の結果に基づいて、受動喫煙に対する喫煙者と非喫煙者の間にある隔たり（ギャップ）を埋めることが今後の受動喫煙防止策を構築するうえで重要であることを論じた。

キーワード：受動喫煙、喫煙経験、職域世代、プレ職域世代（高校生）

問題・目的

本稿は、千葉県松戸圏域 地域・職域連携推進協議会が推進する「受動喫煙の防止」「たばこをやめたい方への支援」のあり方を検討するうえで必要な基礎的資料を収集することを目的に行った質問紙調査をもとに、受動喫煙に関する分析結果の概要をまとめたものである。この調査分析によって、受動喫煙に関する管内の現状を把握するとともに、より効果的な防止策を導くための指針を得たいと考える。具体的には、受動喫煙に関する知識の浸透度と健康への影響を喫煙者および非喫煙者の両者の視点から把握し、その相違点に基づいて受動喫煙を促進する心理的要因を明らかに

するとともに、正確な知識を周知・啓発するための要点を整理する。なお、調査は、受動喫煙の防止に向けた未成年層への周知・啓発を行うための方策を探ることも視野に入れて、職域世代（成年男女）にプレ職域世代（高校生男女）を加えて行われた。

方 法

調査対象

1. 職域世代

松戸圏域 地域・職域連携推進協議会および同作業部会の委員が属する機関の職員や会員、松戸圏域内の市町村等で実施した健康教育や検診（健診）事業等の参加者、松戸圏域 地域・職域連携推進協議会において実施した出張講座の参加者等に本調査への協力を依頼し、計1,715名から回答を得た。調査対象者の性別、年代、職業の内訳

2019年11月30日受付

* 江戸川大学 人間心理学科教授 社会心理学

** 千葉県松戸健康福祉センター地域保健課

は、図1～図3の通りである。

査対象者の性別、学年の内訳は、図4～図5の通りである。

2. プレ職域世代（高校生）

千葉県松戸健康福祉センター管内（松戸市、流山市、我孫子市）の高等学校3校に調査への協力を依頼し、1,560名の高校生から回答を得た。調

調査期間

2018年12月～2019年3月

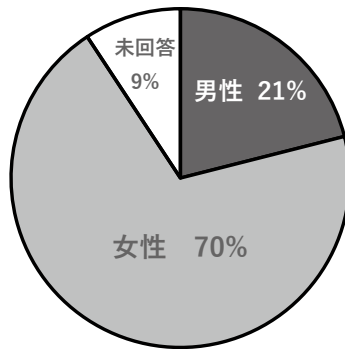


図1 職域世代における回答者の性別の内訳

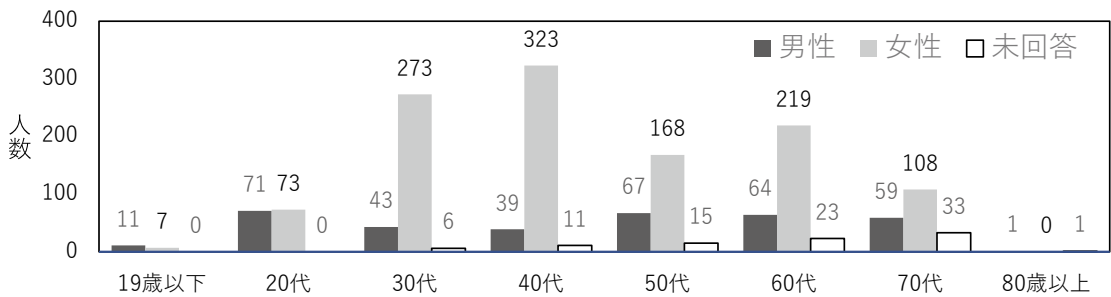


図2 職域世代における回答者の年代の内訳

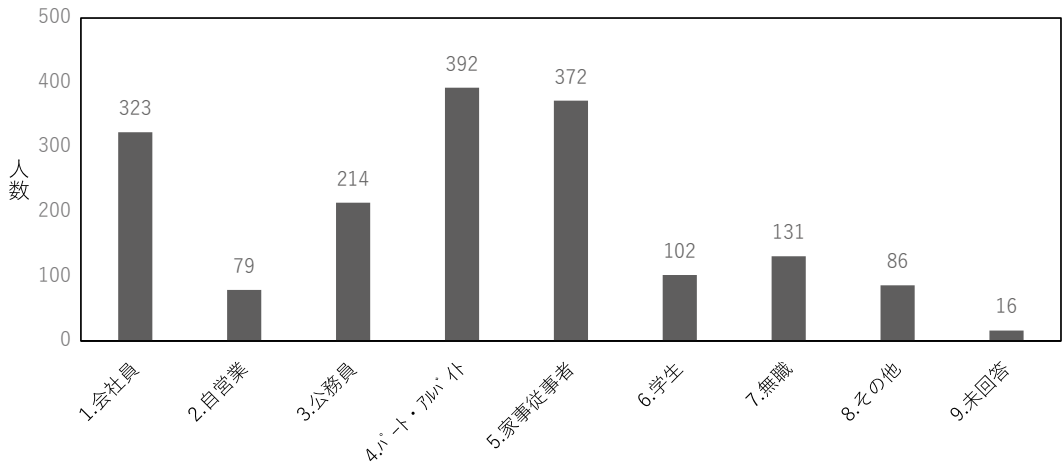


図3 職域世代における回答者の職業の内訳

調査方法

1. 職域世代

健康教育や検診（健診）事業を実施した際に、参加者に調査への協力を依頼し、同意を得たうえで質問紙を配布し、その場で回答してもらい回収した。調査は、自記式・無記名で行った。

2. プレ職域世代（高校生）

教室において教諭から生徒に配布し、自記式・無記名による集合調査を行った。調査終了後、そ

の場で回収した。

調査内容

【職域世代を対象とする調査の内容】

1. 性別，年代，職業

年代については、「19歳以下」「20代」「30代」「40代」「50代」「60代」「70代」「80代」の中から1つを選択させた。職業については、「会社員」「自営業」「公務員」「パート・アルバイト」「家事従事者（専業主婦，主夫）」「学生」「無職」「その他」の中から1つを選択させた。

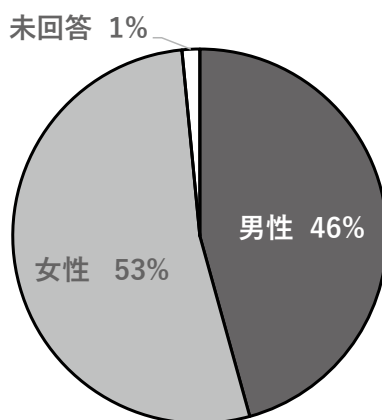


図4 プレ職域世代（高校生）における回答者の性別の内訳

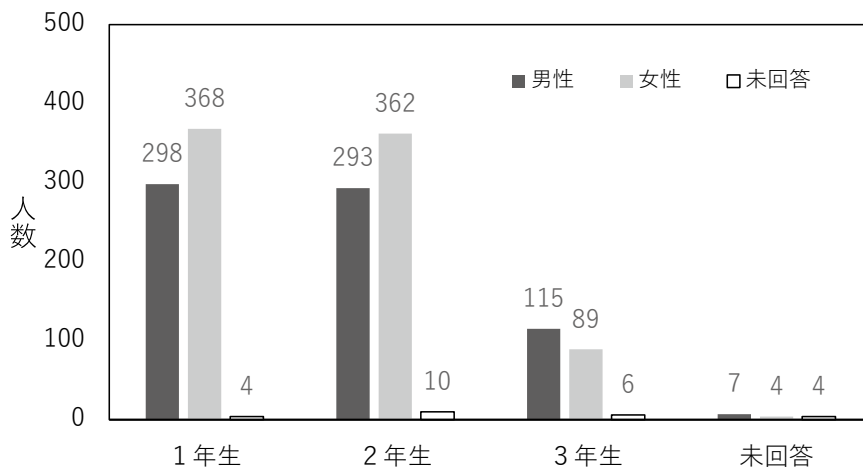


図5 プレ職域世代（高校生）における回答者の学年の内訳

2. 受動喫煙という言葉の認知度

「知っている」「言葉は知っているが内容は知らない」「知らない」の中から1つを選択させた。

3. 受動喫煙にあたる状況の認知度

「目のまえでたばこを吸う人がいる」「目のまえではないが、仕切りのない同じ部屋でたばこを吸う人がいる」など9つの状況について受動喫煙に該当すると思うものをすべて選択（複数選択）させた。

4. 受動喫煙による非喫煙者の健康への影響について

「知っている」「だいたい知っている」「知らない・初めて聞いた」の中から1つを選択させた。

5. 受動喫煙による不快な思いや健康にかかわる症状について

「においに悩まされた」「気分が悪くなった」など12の状態・症状について経験があるものすべてを選択（複数選択）させた。

6. 喫煙経験

「もともと吸わない」「以前は吸っていたがやめた」「ときどき吸う日がある」「毎日吸っている」の中から1つを選択させた。

※「もともと吸わない」を選択した人は、ここで調査終了とした。

※「以前吸っていたがやめた」を選択した人に対して、サブクエスチョンとして、やめてからの年月（○年○ヶ月）を尋ねた。

※「ときどき吸う日がある」「毎日吸っている」を選択した人に対して、サブクエスチョンとして、禁煙に対する意識を「やめたい」「本数を減らしたい」「やめる気はない」の中から1つを選択させた。

7. 禁煙にチャレンジしようと思った理由

喫煙経験がある人のうち、禁煙を試みたことがある、または、たばこをやめたいと思ったことがある方のみを対象に、「自分自身の健康が気に

なったから」など12の理由について、該当するものを3つまで選択させた。

8. 禁煙を成功、継続するために有効・必要だと思うこと

喫煙経験がある人のうち、禁煙に成功した方、または、挑戦したが禁煙に至っていない方のみを対象に、「禁煙補助剤（ニコチンガムやパッチ）の活用」など10の事柄に該当するものを3つまで選択させた。

9. たばこを吸う理由（やめられない理由）

現在、たばこを吸っている人のみを対象に、「やめると手持ち無沙汰になるから、くせになっているから」など11の理由について該当するものを3つまで選択させた。

※本稿では紙数の都合により、7、8、9を除く集計・分析結果を掲載する。

【プレ職域世代を対象とする調査の内容】

1. 性別、学年

2. 受動喫煙という言葉の認知度

職域世代に対する質問と同様に、「知っている」「言葉は知っているが内容は知らない」「知らない」の中から1つを選択させた。

3. 受動喫煙にあたる状況の認知度

職域世代に対する質問と同様に、「目のまえでたばこを吸う人がいる」など9つの状況について受動喫煙に該当すると思うものをすべて選択（複数選択）させた。

4. 受動喫煙による非喫煙者の健康への影響について

職域世代に対する質問と同様に、「知っている」「だいたい知っている」「知らない・初めて聞いた」の中から1つを選択させた。

5. 受動喫煙による不快な思いや健康にかかわる症状について

職域世代に対する質問と同様に、「においに悩まされた」など12の状態・症状について経験があるものすべてを選択（複数選択）させた。

6. たばこに対する印象（イメージ）

「かっこいい」「不健康」など12項目について該当すると思うものを3つまで選択させた。

7. 喫煙率の推定

大人（20歳以上）の何%がたばこを吸う習慣があると思うかを「0%」「10%」「20%」「30%」「40%」「50%」「60%」「70%」「80%」「90%」「100%」の中から1つ選択させた。

8. 将来の喫煙可能性

「吸うと思う」「吸わないと思う」「わからない」の中から1つを選択させた。

※本稿では紙数の都合により、7を除く集計・分析結果を掲載する。

結果

職域世代を対象とする調査の単純集計

1. 喫煙経験と禁煙に対する態度

図6に示す通り、喫煙経験の実態については、回答者のうち、たばこを「もともと吸わない」人は72.8%、「以前は吸っていたがやめた」人は18.0%であり、本調査の対象者（職域世代）のうち非喫煙者が9割を占めている。また、「ときど

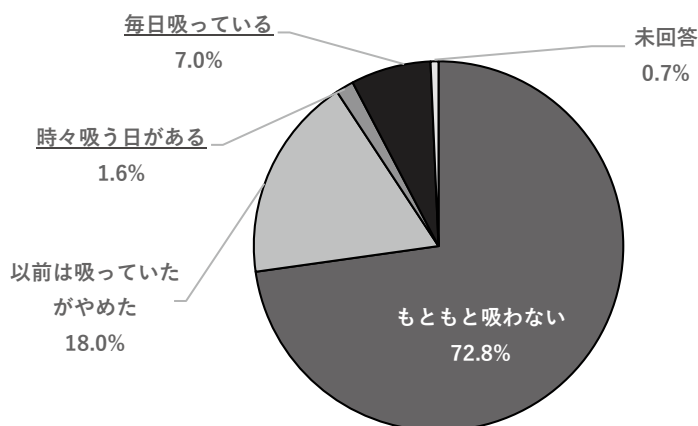


図6 喫煙経験の有無（職域世代）

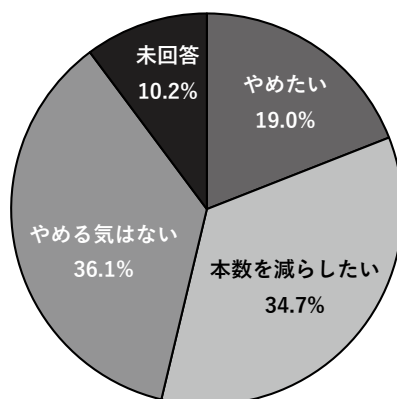


図7 喫煙者の禁煙に対する意識

き吸う日がある」人は1.6%、「毎日吸っている」人は7.0%であり、喫煙者は1割に満たない(8.6%)。

喫煙者の禁煙に対する態度を示したのが図7である。喫煙者のうち、「やめたい」と思っている人は19.0%、「本数を減らしたい」と思っている人は34.7%であり、喫煙者の約半数は、禁煙あるいは減煙をしたいと考えているが、36.1%は「やめる気はない」と回答している。

2. 「受動喫煙」に対する認識の実態

図8に示した通り、「受動喫煙」については94.3%の人がその言葉を知っているが、意味まで理解している人は89.4%である。一方、「受動喫煙」という言葉を「知らない」と回答した人は、

4.1%と少ない。「受動喫煙」という言葉自体は多くの人に認識されている。

図9は、受動喫煙に該当する状況の認知度について示したものである。「受動喫煙」にあたる行為において、「1.目の前でたばこを吸う人がいる」「2.仕切り等のない同じ部屋でたばこを吸う人がいる」「3.換気扇の下であっても同じ部屋でたばこを吸う人がいる」「5.禁煙席と喫煙席が完全に区分けされていない場所でたばこを吸う人がいる」「6.喫煙室や喫煙ルームからもれてくるたばこの煙を吸ってしまう状況」といった直接的に煙にさらされる行為についての認識は高く、7割以上が受動喫煙にあたるかと回答している。

一方、「4.同じマンションの中で、ベランダでたばこを吸う人がいる」「7.たばこを吸った直後

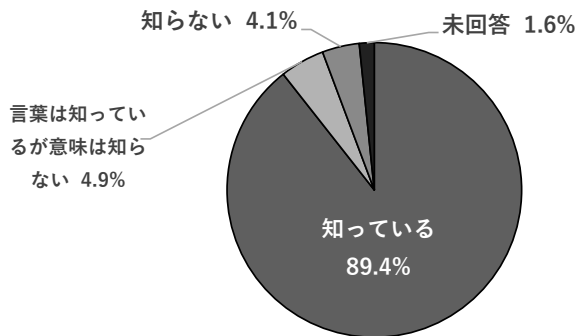


図8 「受動喫煙」という言葉の認知度（職域世代）

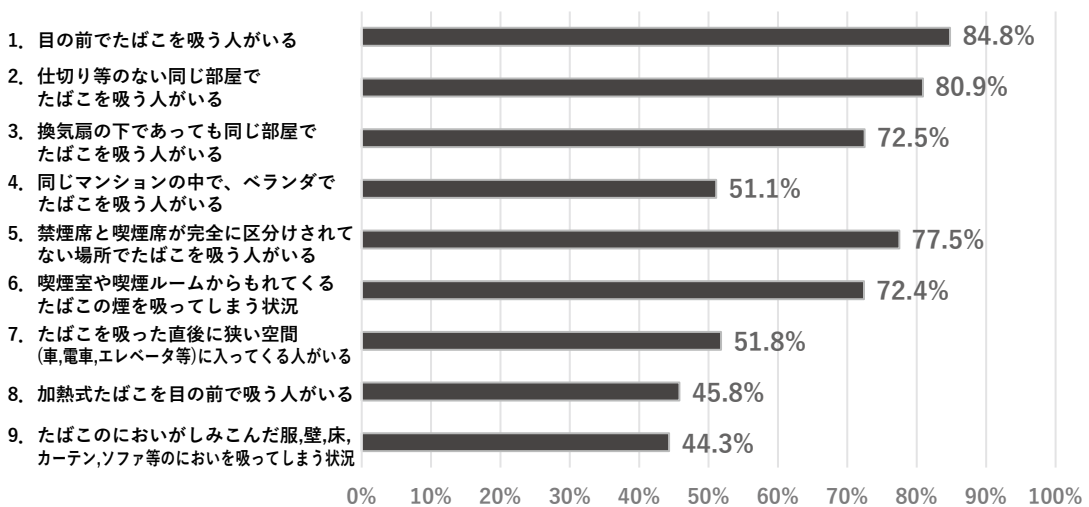


図9 受動喫煙に該当する状況の認知度（職域世代）

に狭い空間に入ってくる人がいる」「8.加熱式たばこを目の前で吸う人がいる」「9.たばこのおいがしみこんだ服、壁等のおいを吸ってしまう状況」といった、直接的にたばこやたばこの煙がイメージされにくい行為に対する受動喫煙の認識は、5割前後にとどまっている。したがって、「受動喫煙の行為」の理解度については、認識が高い行為とまだ認識が不十分な行為があるといえる。

3. 受動喫煙が健康に及ぼす影響について

図10は、受動喫煙が非喫煙者の健康に及ぼす影響に関する認知の実態を示したものである。「受動喫煙」が非喫煙者の健康にも影響を与える

ことを知っている人は、「知っている」「だいたい知っている」をあわせると、97.7%であった。また、「知らない」と回答した人は、1.0%と少ない。したがって、ほとんどの人が「受動喫煙」が非喫煙者の健康に影響を及ぼすということを認識している。

図11は、受動喫煙に起因する不快感や健康にかかわる症状の経験実態を示したものである。「受動喫煙」によって生じた症状等で最も高かった項目は、「においに悩まされた」であり、76.6%の人があったと回答している。また、「気分が悪くなった」と回答した人は33.6%、「イライラした」「息苦しくなった」「咳」の経験も2割

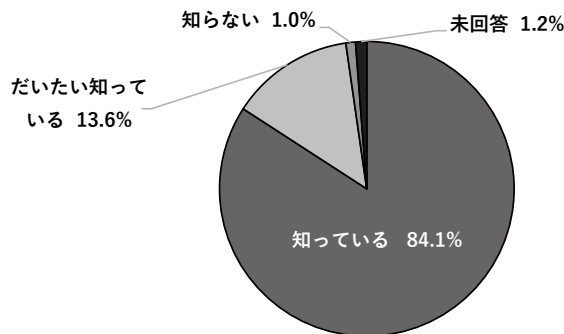


図10 受動喫煙が非喫煙者の健康に及ぼす影響の認知度（職域世代）

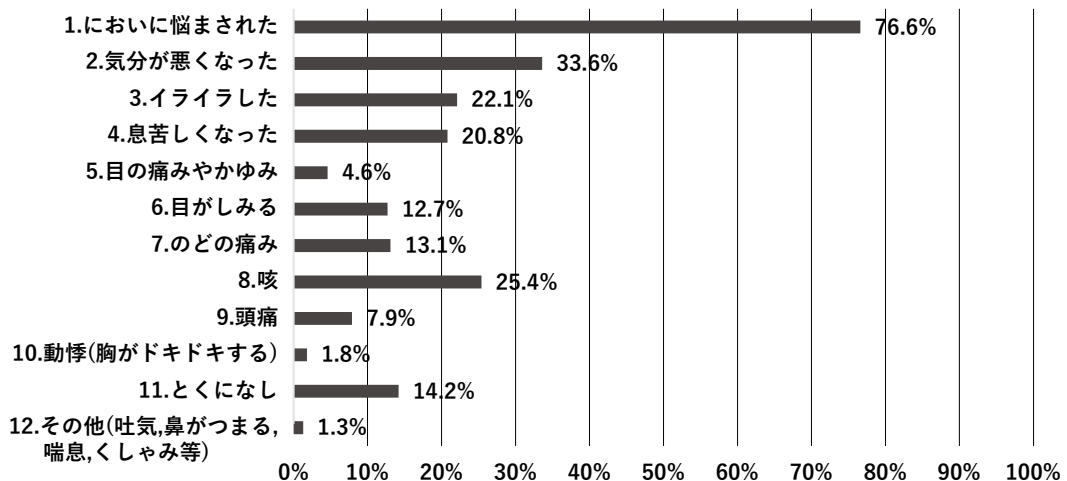


図11 受動喫煙に起因する不快な思いや健康にかかわる症状の経験率（職域世代）

を超えていた。したがって、受動喫煙に起因する症状は、「においに悩まされた」が最も多く、次いで、咳や息苦しいといった呼吸器系の症状をもたらすといえる。また、「イライラした」という心理的な不快感も比較的多かった。

プレ職域世代を対象とする調査の単純集計

1. 将来の喫煙可能性とたばこに対する印象

プレ職域世代（高校生）に将来たばこを吸う可能性について尋ねた結果を示したのが図12である。その結果、「吸わないと思う」人は84.9%、「吸うと思う」と回答した人は2.1%であった。8割以上の高校生が将来たばこを吸わないと考えて

おり、将来たばこを吸うと考えている生徒はかなり少ない傾向にある。

図13は、たばこに対する印象を尋ねた結果を示したものである。高校生のたばこについての印象の中で最も選択率が高かった項目は、「不健康」で73.1%であった。次いで、「たばこ臭い」(63.8%)、「たばこを吸わない人につきあいたい」(48.5%)であった。また、たばこに対する肯定的な印象項目である「大人っぽい」は4.6%、「カッコいい」は3.7%、「クール」は2.2%であり、少数意見にとどまった。総じて、高校生は、たばこに対して否定的印象をもっていることがうかがわれた。

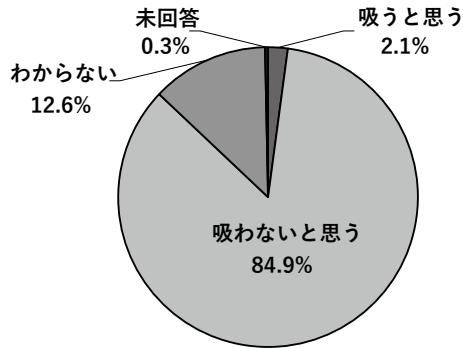


図12 将来の喫煙可能性（プレ職域世代）

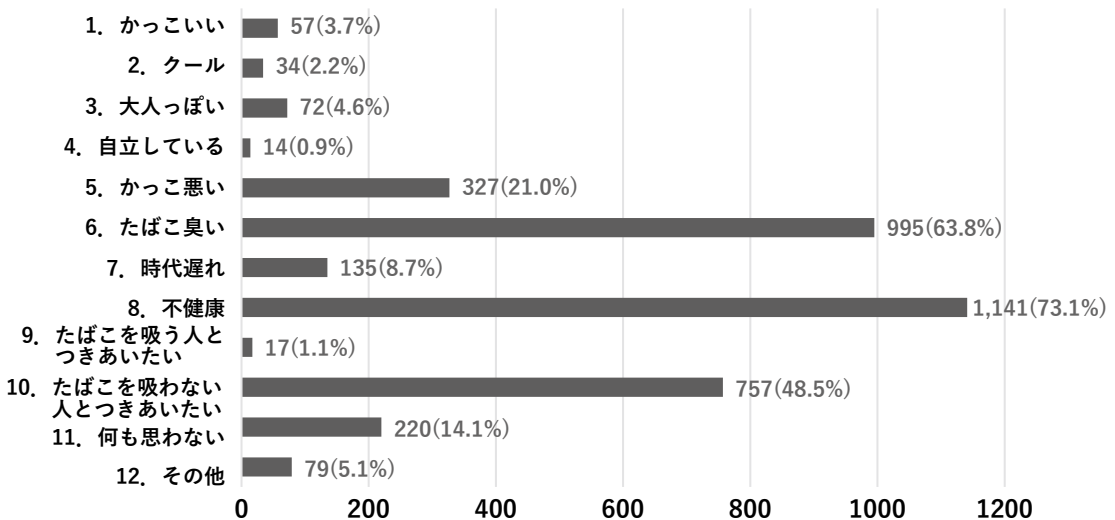


図13 たばこに対する印象（プレ職域世代）

2. 「受動喫煙」に対する認識の実態

図14に示した通り、「受動喫煙」については95.7%の高校生がその言葉を知っているが、意味まで理解している人は86.0%である。一方、「受動喫煙」という言葉を「知らない」と回答した人は、1.9%と少ない。「受動喫煙」という言葉自体は多くの高校生に認識されている。

図15は、受動喫煙に該当する状況の認知について示したものである。「受動喫煙」にあたる行為において、「1.目の前でたばこを吸う人がいる」の認識は高く、9割を超えていた。「2.仕切り等のない同じ部屋でたばこを吸う人がいる」の認識は7割を超えていたが、「3.換気扇の下であつても同じ部屋でたばこを吸う人がいる」「5.禁煙席

と喫煙席が完全に区分けされていない場所でたばこを吸う人がいる」「6.喫煙室や喫煙ルームからもれてくるたばこの煙を吸ってしまう状況」では6割前後の認識であった。一方、「4.同じマンションの中で、ベランダでたばこを吸う人がいる」「7.たばこを吸った直後に狭い空間(車、電車、エレベータ等)に入ってくる人がいる」「8.加熱式たばこを目の前で吸う人がいる」「9.たばこのにおいがしみこんだ服、壁等、等々においを吸ってしまう状況」といった、直接的にたばこや煙がイメージされにくい行為に対する受動喫煙の認識は、3割前後にとどまっている。したがって、「受動喫煙の行為」の理解度については、認識が高い行為とまだ認識が不十分な行為がある。

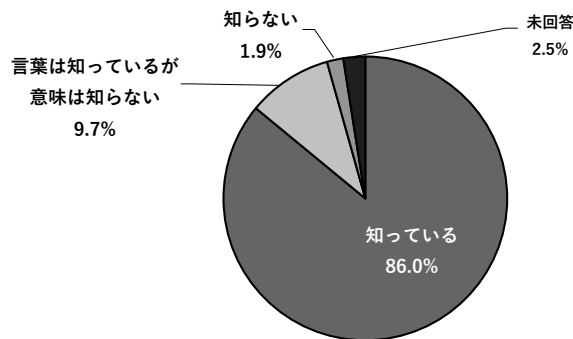


図14 「受動喫煙」という言葉の認知度 (プレ職域世代)

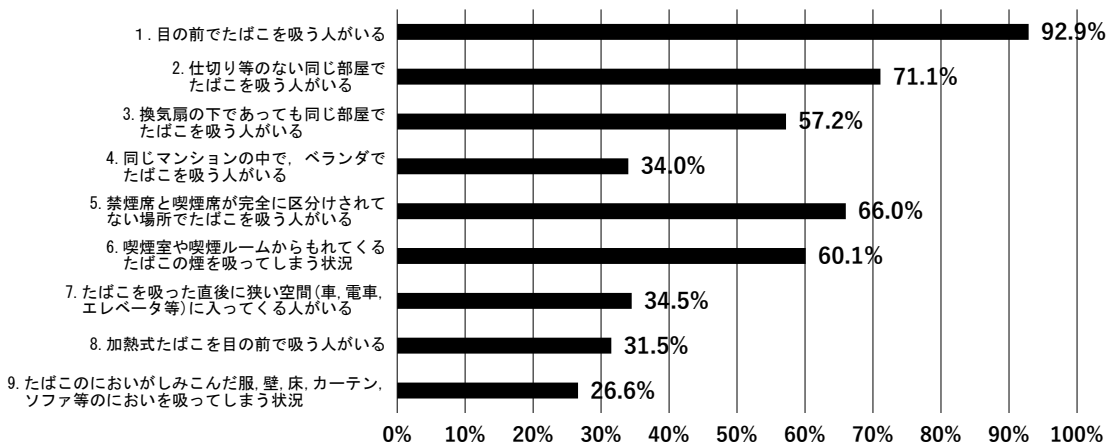


図15 受動喫煙に該当する状況の認知度 (プレ職域世代)

また、職域世代（図9）と比較すると、「目の前でたばこを吸う人がある」以外について高校生
の認知度が10ポイント程度低かった。

3. 受動喫煙が健康に及ぼす影響について

図16は、受動喫煙が非喫煙者の健康に及ぼす影響に関する認知の実態を示したものである。「受動喫煙」が非喫煙者の健康にも影響を与えることを知っている高校生は、「知っている」「だいたい知っている」をあわせると、95.1%であった。また、「知らない」と回答した人は、1.6%と少ない。したがって、ほとんどの高校生が「受動喫

煙」が非喫煙者の健康に影響を及ぼすということを認識している。

図17は、受動喫煙に起因する不快感や健康にかかわる症状の経験実態を示したものである。「受動喫煙」によって生じた症状等で最も高かった項目は、「ににおいに悩まされた」であり、65.3%の人があったと回答している。また、「気分が悪くなった」と回答した人は34.6%、「イライラした」「息苦しくなった」「のどの痛み」の出現も2割を超えていた。したがって、職域世代と同様に、高校生においても受動喫煙に起因する症状は、「ににおいに悩まされた」が多く、次いで、

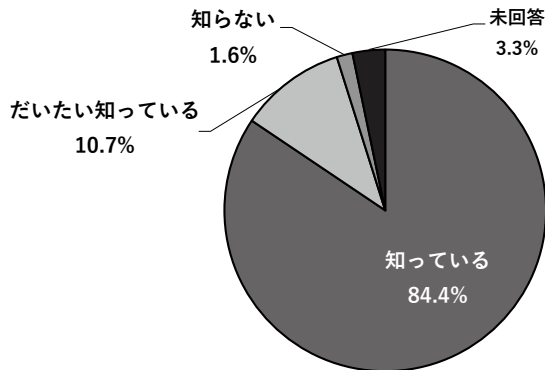


図16 受動喫煙が非喫煙者の健康に及ぼす影響の認知度（プレ職域世代）

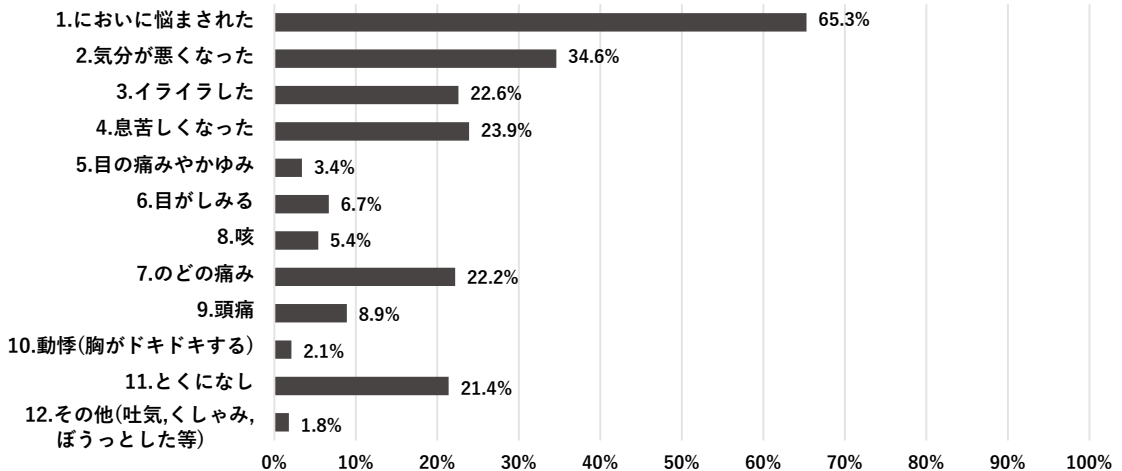


図17 受動喫煙に起因する不快な思いや健康にかかわる症状の経験率（プレ職域世代）

息苦しいといった呼吸器系の症状の経験率が比較的高かった。また、「イライラした」という心理的な不快感も比較的高く、経験率は2割を超えている。

職域世代を対象とする調査のクロス集計

1. 喫煙経験の有無と受動喫煙によって生じる健康への影響の関連

図18は、受動喫煙によって生じた健康への影響（不快な思いや症状）10項目について、選択された項目数を回答者ごとに算出し、回答者の喫煙経験（もともと喫煙しない、喫煙していたがやめた、喫煙している）ごとに平均個数を示したものである。「もともと喫煙しない人」では平均2.45件、「喫煙していたがやめた人」では平均1.77件、「喫煙している人」では平均0.81件で

あった。喫煙経験を独立変数とし、受動喫煙に起因して経験した症状の個数を従属変数とする1要因の分散分析を行った結果、主効果が有意であった ($F(2,1700) = 63.37, p < .001$)。

「もともと喫煙しない人」は、受動喫煙によって、平均2~3件の症状に悩まされており、「喫煙していたがやめた人」は平均1~2件、「喫煙している人」は受動喫煙による症状はないか、あっても1件程度である。受動喫煙に起因する症状は、「たばこを吸っている人」よりも、「たばこを吸わない人」に多く生じており、両者の間に大きな隔たりがあると言える。次に、どのような症状に両者の差が見られるのかを検討した。

図19~23は、喫煙経験によって受動喫煙に起因する症状に違いがあるかを症状別に比較したものである。受動喫煙によって、『においに悩ま

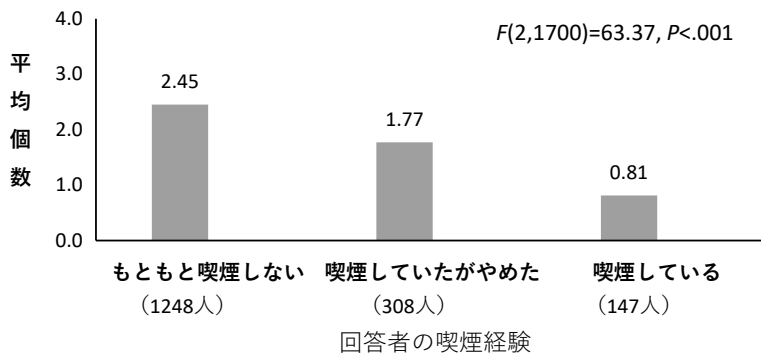


図18 受動喫煙によって生じた健康への影響 (症状の個数)

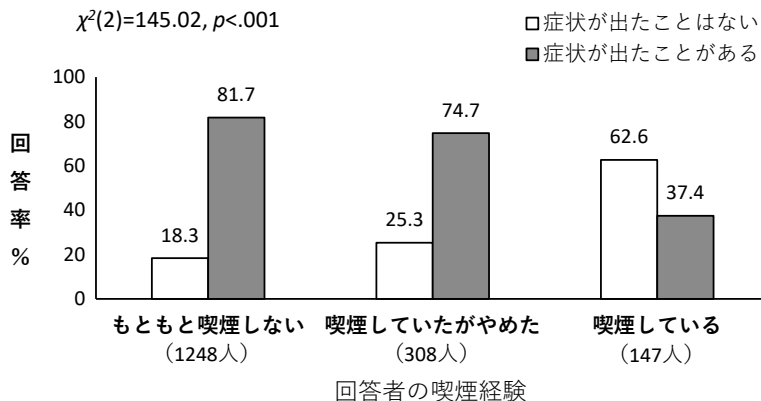


図19 受動喫煙によって、においに悩まされたことがある

れたことがある』と回答した割合は、「もともと喫煙しない人」が81.7%、「喫煙していたがやめた人」が74.7%、「喫煙している人」が37.4%となっており、「喫煙していない人」は、なおに悩まされている人が多いのに対し、「喫煙している人」は、なおに悩まされたことがない割合が6割を超えている。 χ^2 検定を行った結果、分布の偏りが統計的に有意であった ($\chi^2(2) = 145.02, p < .001$)。

受動喫煙によって、『イライラしたことがある』と回答した割合は、「もともと喫煙しない人」が25.9%、「喫煙していたがやめた人」が14.9%、「喫煙している人」が6.8%となっており、分布の

偏りが統計的に有意であった ($\chi^2(2) = 39.31, p < .001$)。

また、『気分が悪くなったことがある』 ($\chi^2(2) = 66.70, p < .001$)、『息苦しくなったことがある』 ($\chi^2(2) = 28.07, p < .001$)、『咳が出たことがある』 ($\chi^2(2) = 50.42, p < .001$) においても喫煙経験の有無によって、症状が生起する割合に統計的に有意な偏りがみられ、「もともと喫煙しない人」「喫煙していたがやめた人」「喫煙している人」の順に症状を経験した率が高かった。

したがって、「たばこを吸っていない人」の多くは、受動喫煙によって生じる症状として、「なおに」を感じるとともに、気分が悪くなったり、

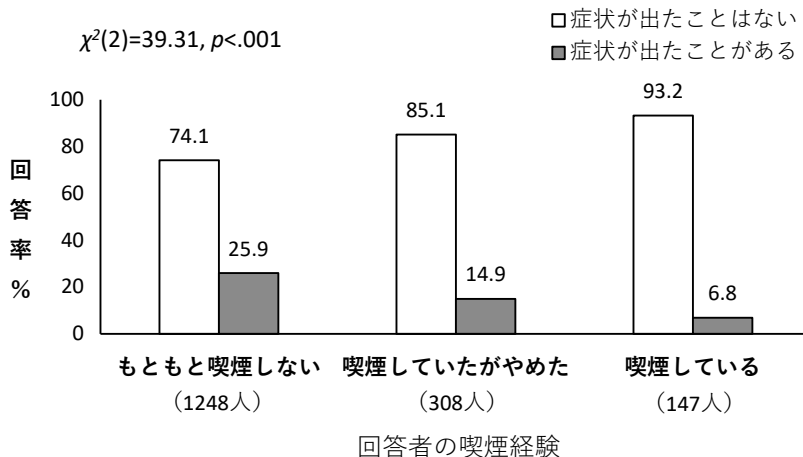


図 20 受動喫煙によって、イライラしたことがある

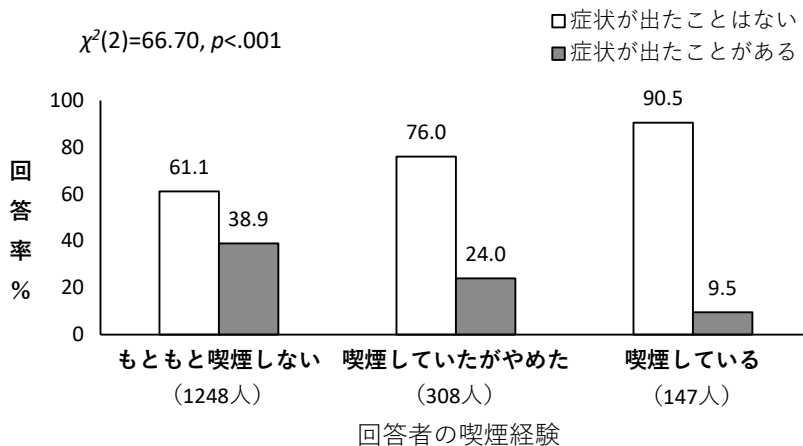


図 21 受動喫煙によって、気分が悪くなったことがある

息苦しさや咳といった呼吸器系の症状を経験する率が比較的高いといえる。また、受動喫煙は「たばこを吸っていない人」の「イライラ」を喚起するなど精神的にも不快な影響を与えていると考えられる。では、受動喫煙は喫煙を経験した人には一切影響を与えないのだろうか。次にこの点を検討するための分析を行った。

2. 受動喫煙によって生じる喫煙者の健康への影響（喫煙者の禁煙志向による比較）

図 24 は、喫煙者の禁煙に対する意識（やめたい、本数を減らしたい、やめる気はない）によって、受動喫煙に起因する症状や不快な思いを経験

した件数に違いがあるかを比較したものである。「たばこをやめたい」と思っている人では、1.39 件、「本数を減らしたい」と思っている人では 0.88 件、「やめる気はない」と思っている人では 0.57 件であった。禁煙に対する意識を独立変数とし、受動喫煙に起因して経験した症状の個数を従属変数とする 1 要因の分散分析を行った結果、主効果が有意であった ($F(2,130) = 3.01, p < .10$)。

したがって、受動喫煙に起因する症状の件数は、先の分析によって、喫煙者而非喫煙者の間でも差が見られたが、喫煙者における禁煙への意識の違いによっても差があり、禁煙を志向している喫煙者においては、症状の経験数がやや多い傾向

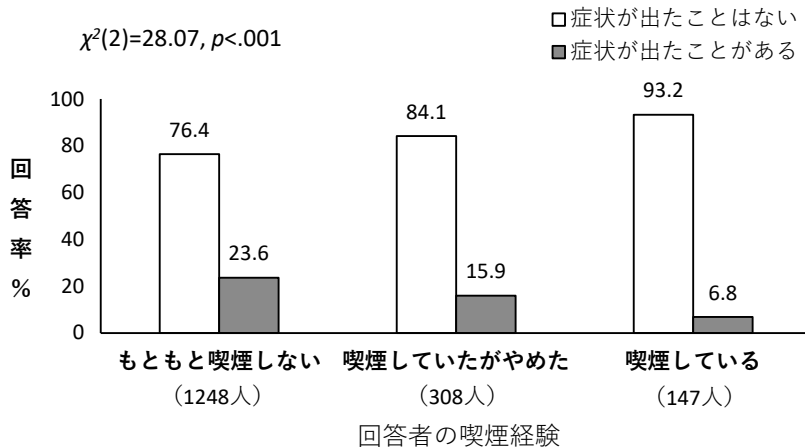


図 22 受動喫煙によって、息苦しくなったことがある

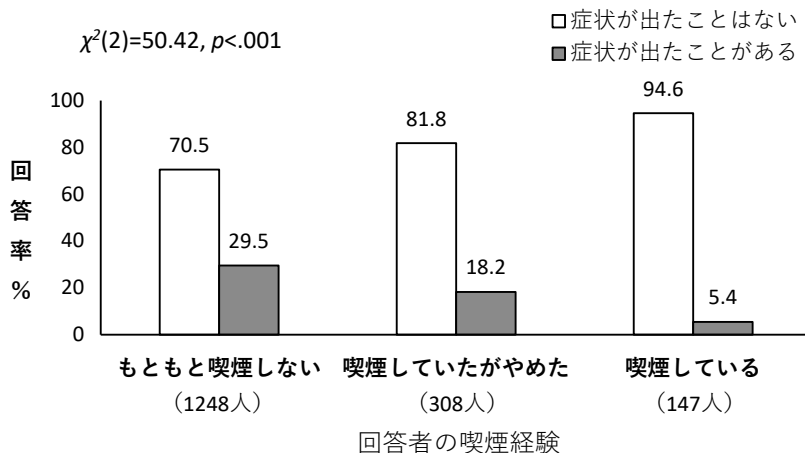


図 23 受動喫煙によって、咳が出たことがある

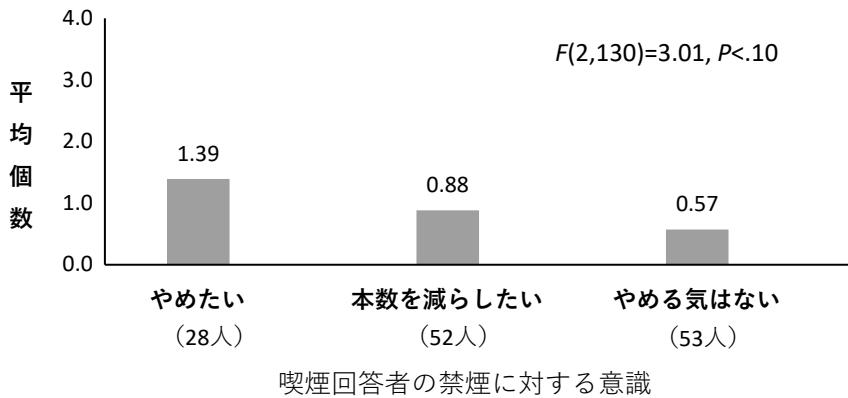


図 24 受動喫煙によって生じた健康への影響 (症状の個数)

にあると言える。

プレ職域世代を対象とする調査のクロス集計

1. 将来の喫煙可能性と受動喫煙によって生じる健康への影響の関連

図 25 は、受動喫煙によって生じた健康への影響 (不快な思いや症状) 10 項目について、選択された項目数を回答者ごとに算出し、回答者の将来の喫煙可能性 (吸うと思う、吸わないと思う、わからない) ごとに平均個数を示したものである。「将来、たばこを吸うと思う」高校生は 0.81 件、「将来、たばこを吸わないと思う」高校生は 2.06 件、「わからない」と答えた高校生は 1.35 件であった。将来の喫煙可能性を独立変数とし、受動喫煙に起因して経験した症状の個数を従属変数とする 1 要因の分散分析を行った結果、主効果が

有意であった ($F(2,1552) = 19.82, p < .001$)。

このように、受動喫煙に起因する症状は、「将来たばこを吸うと思う」高校生よりも、「将来たばこを吸わないと思う」高校生に多く生じており、両者の間に大きな隔たりがあると言える。次に、どのような症状に両者の差が見られるのかを検討した。

図 26～図 30 は、高校生における将来の喫煙可能性によって受動喫煙に起因する症状に違いがあるかを症状別に比較したものである。受動喫煙によって、『においに悩まされたことがある』と回答した割合は、「将来たばこを吸うと思う」高校生が 27.3%、「将来たばこを吸わないと思う」高校生が 68.7% となっており、将来たばこを吸わないと思っている高校生は、においに悩まされている人が多いのに対し、将来たばこを吸うと

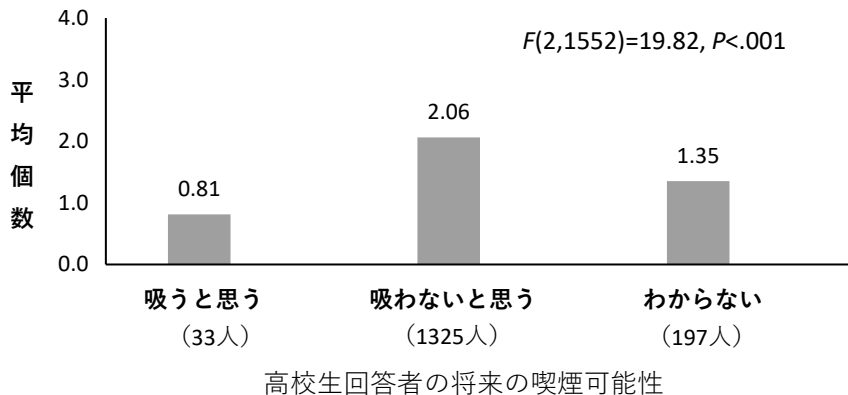


図 25 受動喫煙によって生じた健康への影響 (症状の個数)

いる高校生は、においに悩まされたことがない割合が7割を超えている。 χ^2 検定を行った結果、分布の偏りが統計的に有意であった ($\chi^2(2) = 51.59, p < .001$)。

受動喫煙によって、『イライラしたことがある』と回答した割合は、「将来たばこを吸うと思う」高校生が6.1%、「将来たばこを吸わないと思う」高校生が24.2%となっており、分布の偏りが統計的に有意であった ($\chi^2(2) = 13.09, p < .01$)。

また、『気分が悪くなったことがある』 ($\chi^2(2) = 39.20, p < .001$)、『息苦しくなったことがある』 ($\chi^2(2) = 17.05, p < .001$)、『咳が出たことがある』 ($\chi^2(2) = 8.62, p < .05$) においても将来の喫煙可能性の有無によって、症状が生起する割合に統計的に有意な偏りがみられ、将来たばこを吸うと思

う高校生よりも、吸わないと思う高校生のほうが症状を経験した率が高かった。

したがって、将来たばこを吸わないと思う高校生の多くは、受動喫煙によって生じる症状として、「におい」を感じるとともに、気分が悪くなったり、息苦しさや咳といった呼吸器系の症状を経験する率が比較的高いといえる。また、受動喫煙は将来たばこを吸わないと思う高校生の「イライラ」を喚起するなど精神的にも不快な影響を与えていると考えられる。

2. たばこに対する印象と受動喫煙によって生じる健康への影響の関連

図31と図32は、将来の喫煙可能性によって、たばこに対する印象に違いがあるかを示したもの

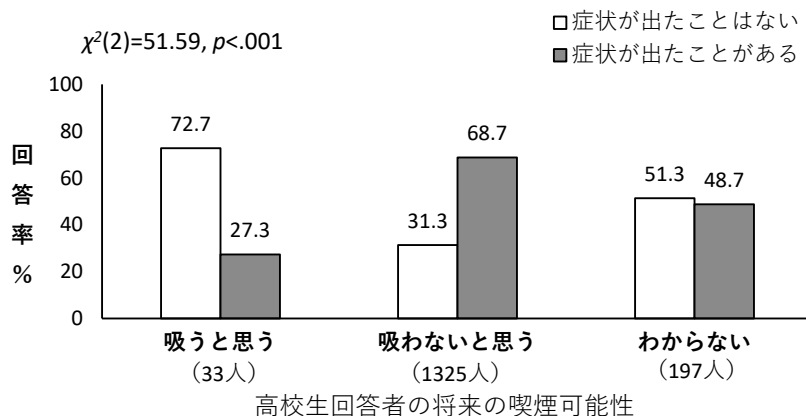


図26 受動喫煙によって、においに悩まされたことがある

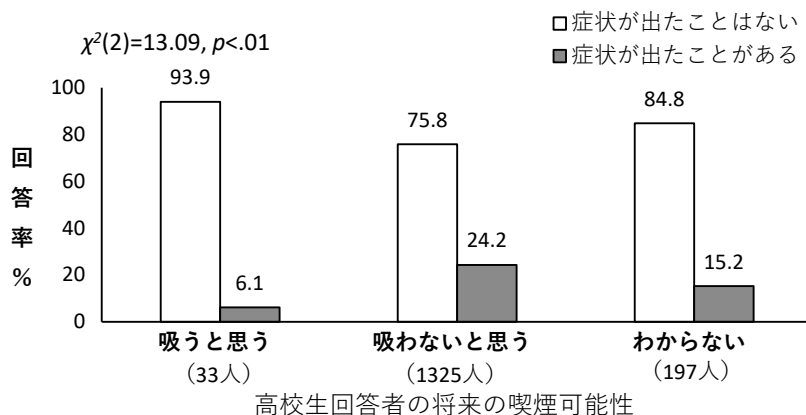
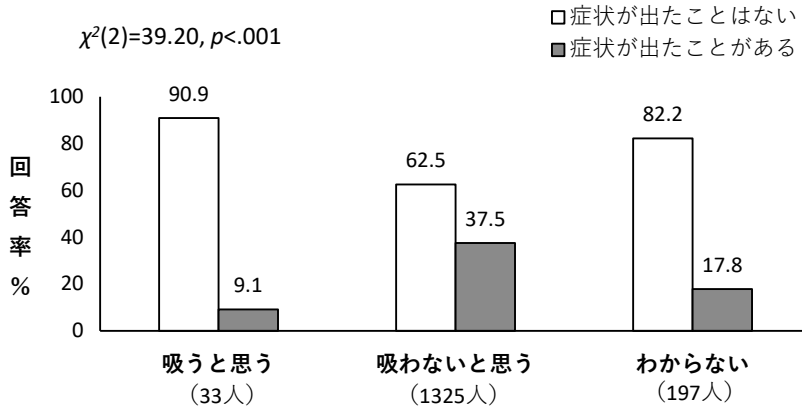


図27 受動喫煙によって、イライラしたことがある

である。図 31 は否定的項目（かっこ悪い、臭い、時代遅れ、不健康、たばこを吸わない人と付き合いしたい）を、図 32 は肯定的項目（かっこいい、クール、大人っぽい、自立している、たばこを吸う人と付き合いしたい）を選択した個数の平均を将来の喫煙可能性ごとに示した。否定的項目を支持した個数が、将来たばこを吸うと思う高校生では 0.7 個、吸わないと思う高校生では 2.31 個、わからないと思う高校生では 1.30 個であった。将来の喫煙可能性を独立変数とし、たばこに対する印象として否定的項目を選択した個数を従属変数とする 1 要因の分散分析を行った結果、主効果が有意であった ($F(2,1552) = 78.98, p < .001$)。

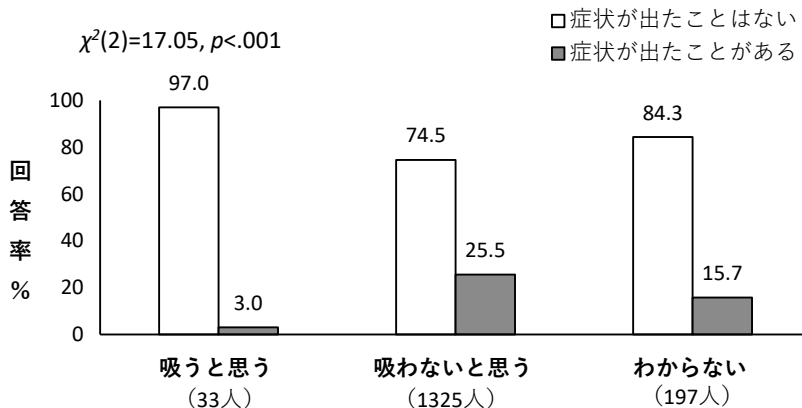
また、肯定的項目を支持した個数が、将来たばこを吸うと思う高校生では、0.87 個、吸わないと思う高校生で 0.08 個、わからないと思う高校生で 0.28 個であった。将来の喫煙可能性を独立変数とし、たばこに対する印象として肯定的項目を選択した個数を従属変数とする 1 要因の分散分析を行った結果、主効果が有意であった ($F(2,1552) = 56.48, p < .001$)。

したがって、高校生のたばこに対する印象は、将来の喫煙可能性によって異なり、将来たばこを吸わないと思う高校生は否定的なイメージを、将来たばこを吸うと思う高校生は肯定的なイメージを持つ傾向がある。



高校生回答者の将来の喫煙可能性

図 28 受動喫煙によって、気分が悪くなったことがある



高校生回答者の将来の喫煙可能性

図 29 受動喫煙によって、息苦しくなったことがある

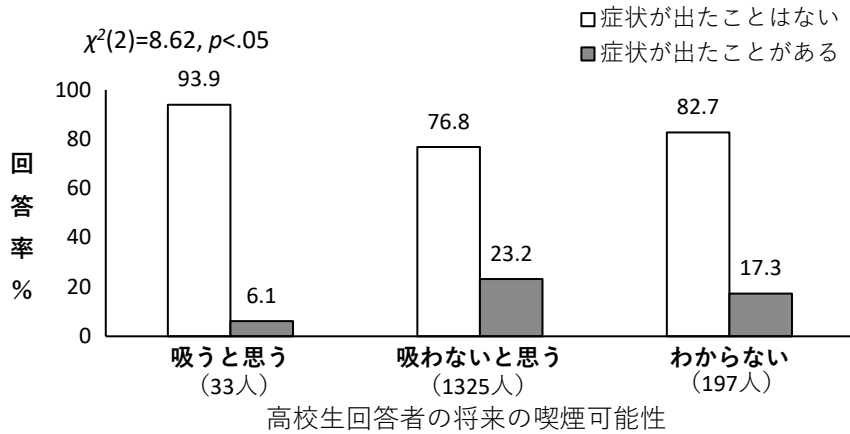


図 30 受動喫煙によって、咳が出たことがある

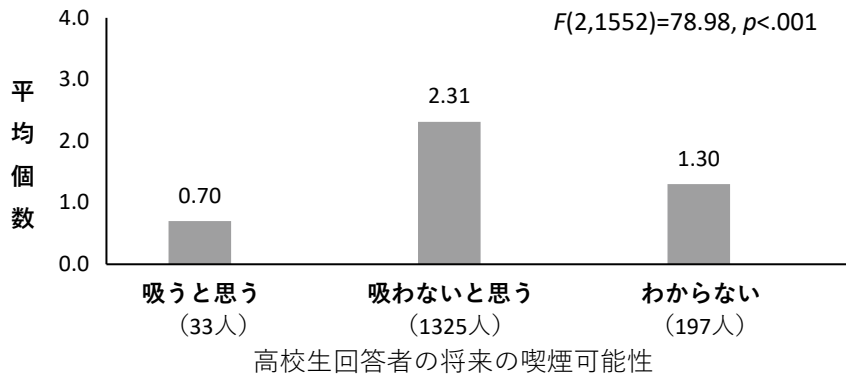


図 31 たばこに対する印象 (否定的項目を支持する個数)

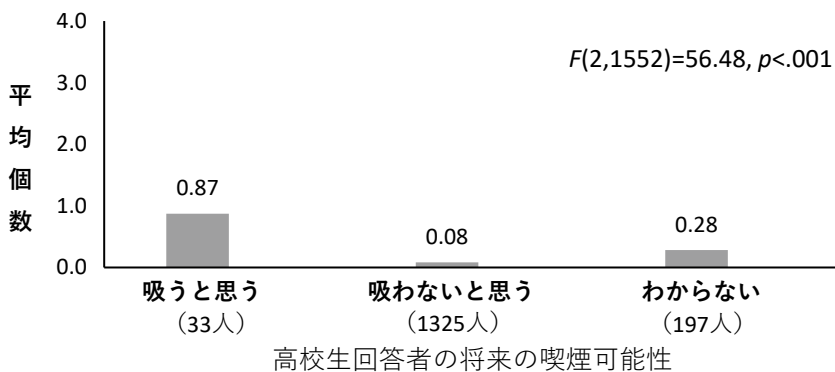


図 32 たばこに対する印象 (肯定的項目を支持する個数)

考 察

1. 受動喫煙に対する認識について

職域世代、プレ職域世代（高校生）ともに、受動喫煙にあたる行為について認識の高い項目と低い項目がみられた。認識の高い項目としては、「目の前でたばこを吸う」「仕切り等のない同じ部屋でたばこを吸う」「禁煙席と喫煙席が完全に区分けされていない場所でたばこを吸う」といった、直接的にたばこの煙がイメージできる項目についての理解が高かった。一方、受動喫煙として認識が低かった行為は、「同じマンションの中で、ベランダでたばこを吸う」「たばこを吸った直後に狭い空間に入ってくる」「たばこのにおいがしみこんだ服、壁、床等のおいを吸う」の項目であった。認識が低かった項目の多くは、いわゆる“3次喫煙（サードHANDSモーク）”にあたる状況、行為であった。さらに、「加熱式たばこを目の前で吸う」ことについても、受動喫煙の認識が低かった。“煙が出ない”ことのイメージが先行しており、喫煙後の呼出煙からの受動喫煙があることの認識等が十分に広まっていない可能性があると考えられる。

今後の対策として、受動喫煙であるという認識の低い「3次喫煙（サードHANDSモーク）」および加熱式たばこについての正しい知識の啓発が必要である。また、健康増進法の一部改正において、「何人も望まない受動喫煙を生じさせることがないように周囲の状況に配慮しなければならないものとする（27条第1項）」とされていることから、受動喫煙の健康被害への意識を高めるとともに、喫煙者の周囲への配慮に向けた啓発を推進する必要があると言える。

2. 喫煙者と非喫煙者の間にみられる

受動喫煙に対する意識のギャップ

喫煙者と非喫煙者との間で、受動喫煙によって生じた症状の件数に差が見られた。具体的な症状としては、『おおいに悩まされた』『イライラした』『気分が悪くなった』『息苦しくなった』『咳が出た』という項目において、喫煙者よりも非喫

煙者のほうが症状を経験する率が高かった。このように、受動喫煙による影響は、精神的負担や呼吸器系の身体症状に及んでおり、非喫煙者においてその傾向が顕著であった。

その背景として、喫煙者は、自身も喫煙している状況での受動喫煙が多いと考えられるため、主流煙、副流煙に曝露される機会が常態化（おいや煙に慣れてしまっている）しており、「受動喫煙によって生じた症状」に気づきにくい可能性があると思われる。対照的に、非喫煙者は受動喫煙によって生じる症状を自覚しやすくなっており、このことが受動喫煙に対する両者の認識に大きな隔たり（意識のギャップ）を生んでいると思われる。

今後の対策として、喫煙者と非喫煙者との間に生じている“意識のギャップ”をデータとして示し、喫煙者への気づきを促すような周知・啓発をはかることが肝要である。それにより、喫煙者自身が受動喫煙防止に向けた行動や禁煙のきっかけの一助となることが期待できる。

3. プレ職域世代（高校生）へ向けた

受動喫煙防止の周知・啓発のために

プレ職域世代（高校生）は、受動喫煙にあたる行為の認識が、職域世代と比べて、やや低い傾向にあったため、受動喫煙から身を守るためにも知識の啓発が必要である。たばこに対する印象については“否定的”なイメージを持っている高校生が多く、『不健康』と回答した件数が1,141件（73.1%）と最も多かった。

また、“将来、習慣的にたばこを吸うと思うか”の質問に対し、『吸うと思う』が2.1%、『吸わないと思う』が84.9%であり8割以上は吸わないと思うとの回答であった。『将来、吸うと思う』高校生は、わずか2.1%にすぎないが、『吸わないと思う』高校生と比較して、受動喫煙に起因する症状の件数が少なく、すでに「受動喫煙による不快な思いや健康に関わる症状」に対して、“気づいていない”状況が示唆された。特に、『おおい』や『息苦しい』『咳が出た』といった項目でその差が顕著であった。

加えて、『将来、吸うと思う』高校生は、たばこに対するイメージについても肯定的な回答が多く、受動喫煙に起因する症状に気づきにくい状況もあり、たばこに対する嫌悪感、抵抗感が低いことが推測される。したがって、このまま肯定的イメージを持ち続けると“喫煙者になりうる可能性”が高いため、喫煙の入り口に立たせないための、たばこに関する正しい知識の啓発などの予防教育が必要であるといえる。

《注》

- (1) 本稿は、千葉県松戸圏域 地域・職域連携推進協議会委員である第一筆者が分析協力者として参加した同協議会による「受動喫煙に関するアンケート」の調査報告である。投稿にあたり、同協議会の新玲子会長（千葉県松戸健康福祉センター長）をはじめとする協議会委員の皆様ならびに松戸健康福祉センター地域保健課の職員の皆様にご理解と多大なるご協力を賜りました。深く感謝申し上げます。